

次世代の放送技術は IP×クラウドだ

NAB SHOW 2107が4月22日～27日まで、米ラスベガス・コンベンション・センター（LVCC）で開催された。10万人以上が参加する世界最大の放送関係イベントである。本誌企画のNABツアーは、シアトルとサンフランシスコの放送局やITトップ企業をまわり、シリコンバレーをバスで走り、サンノゼからラスベガスへ飛んだ。（レポート：吉井 勇・本誌編集部、写真：平石能敬、吉井 勇）



特集構成

- テッド若山氏が伝えるアメリカ放送業界の再編
- ワイズ・メディア塚本幹雄氏が見た変化は「リニア／ライブへの軸足」



ツアーメンバーとNAB展示各社のゲスト総勢65人でNAB期間中に大懇親と意見交換会を開催

本誌連載筆者テッド氏が ツアーメンバーに送ったメール

「今年のNABは、放送のIP（インターネットプロトコル）化が始まった年として重要なイベントでした。IPが主流になった後で、『私はそのゼロ年をNABにいて体感した』と自慢して下さい」。これは本誌NABツアーメンバー33人に届いたメールで、送り主は現地で行方アドバイスしてくれた本誌連載「Mr. Tedのアメリカ最新メディア速報」（本号で85回）筆者で、米国放送業界アナリストのテッド若山氏だ。

「IP化ゼロ年」と言い切った理由を次のよ

うに説明する。①アメリカの地上波放送がUDP方式によるIP放送「ATSC 3.0」規格に変わること、②ABC、CBS、Fox、NBCの4大ネットワークがネット同時配信を始めたこと、③Sling TV（Dish Network）やPlayStation Vue（Sony）などのOTT6事業者が地上局や多チャンネルを同時配信したこと、④局内の設備がオールIP化へ動き出したこと、⑤スマホなどのIPデバイスが伸長したことを挙げる。

また、3月にはインセンティブ・オークションとして地上放送局が周波数を返上するための競売があり、地上波チャンネルは50から36に減少するなどの変化もあった。こうした変容を

LVCCに集まった約10万人のメディア関係者は共有したのである。

アメリカの次世代放送規格 「ATSC 3.0」が動く

地上放送の規格が映像や音声、データなどの個別のストリームを共通の信号形式で1つのストリームとするTS（トランスポートストリーム）方式から、大きくIP方式に変更。これにより放送とインターネットの機能が融合する「ATSC 3.0」規格へ動き出す。

主な送信側（6MHz帯域）の仕様は、IPのトランスポートプロトコルとして遅延が少ないUDPを採用し、アプリケーションはHTML5、モバイル動画はMPEG-DASH、コーデックは低ビットレートで4K/60pに拡張できるスケーラブルHEVC、配信速度は30Mbps、単一周波数ネットワーク（SFN）で、現行のATSC 1.0と大きく変わり、互換性もない。

受信側は、HTML5アプリで画面構成し、4K/HDRを地上波で実現、HD/HDR、SDにも同時対応し、AC-4/MPEG-Hによるイマージョン・オーディオで、放送をモバイル直接受信